

日本ペスタロッチャー・フレーベル学会 関西地区研究会

平成 22 年度 第四回課題研究院会・近畿地区議事録

日時；平成 23 年 7 月 23 日（土）13 時 30 分～16 時 30 分

場所；龍谷大学深草校舎 紫英館 2F 第四共同研究室会

参加者；宍戸健夫、浅野俊和、松川礼子、劉蓮蘭、田岡由美子、澤田真弓、
藤井恵美子、青木好代、石川道夫

欠席者；渡邊満、荘司泰弘、酒井玲子、柏原栄子

[研究会の主旨]

2009 年秋スタートの日本 PF 学会の課題研究は、テーマを「子育て支援」とすることになった。従来、どちらかという教育理論、教育史的な研究に重点を置いてきた本学会が、時代や社会が求めている重要な課題に取り組んでいくという画期的な研究テーマであり、2012 年に政府が予定している幼保一元化を見据えて「子育て支援」の在り方を学会としてどのように提言していくかを課題としている。

1. 研究報告

○浅野俊和「戦時下保育運動に見る『農繁期託児所』」

- ・ペスタロッチャー・フレーベル学会の年次大会で、これまでも浦辺史の教員時代やペスタロッチャーへの傾倒について研究報告を重ねてきた浅野会員が、第 2 次大戦中の戦時下、農村における労働力不足への対策や食料増産を意図して、全国各地で農村部に設けられた「季節共同保育所」についての、浦辺史と阿部和子の共著『季節共同保育所』（中央社会事業協会社会事業研究所、1940 年）を中心に、戦時下保育運動の中での「農繁期託児所」について報告した。当時の農村での農繁期に限った保育事業は、農繁期保育所、季節託児所などの故障が混在していたが、浦辺らは、農業のみならず、他の職種でも繁忙期に臨時に開設される保育所を含めて、「季節共同保育所」という表現を選択したものと見られる。
- ・この本は当初、社会事業研究所の「社会事業パンフレット」シリーズの 2 冊目として出されたもので、奥付も研究者の名になっているが、「はしがき」から浦辺、阿部の 2 人が著者と分かる。構成は、浦辺が経営編を阿部が保育編を担当し、保育編は、保育所の日から始まり、丈夫なからだ、よい習慣、たのしい遊び、給食、手のかかる子供、乳児を預かるにはという、保育問題研究会（以下、保問研）の部会構成になった内容構成となっており、特にその第三部会の成果を生かしていると考えられる。一般には、保問研の成果は、その会長であった城戸幡太郎の『幼児教育論』とされてい

る。

- ・ちなみに保問研の第一部会のテーマは「保育過程」や「生活訓練」、阿部和子が熱心に参加した第二部会は、「幼児の保健衛生」をテーマに「健康保育、衛生的訓練、栄養、転住保育、医療保健」の問題と取り組み、第三部会は「困った子供の問題」をテーマにしていた。
- ・本書は、『保育問題研究』の誌上で川崎大治により、「季節保育所発展の為に一つのエポックを画した」と評価された。戦意高揚を説く精神主義的な農繁期託児所に対して、託児所の「経営法」や「保育法」を具体的に捉え、生産力増強のための一時のものではなく、子どもや母親を保護・教育する常設の「保育所」を目指しての提言が評価されたものである。
- ・浦辺は、東京帝国大学セツルメントの職員時代から農繁期託児所に感心を持っていたが、「救済型」の農繁期託児所を批判していたが、当初ルポルタージュ的な問題提起の域を出ていなかったものの、保問研とかかわり、社会事業研究所の一員となった後は、統計などに基づいた科学的な分析を駆使し、現実的な改善策を提案するようになった。
- ・また阿部は、保問研のリーダー三木安正の求めに応じ、社会事業研究所の助手の仕事を辞して、神奈川県中郡高部屋村（現在の伊勢原市）で、村の社会保健館内に設けられた常設の保育所「愛育園」で実験保育を担当した。
- ・質疑応答では、このような社会事業パンフレットが実際どの程度まで一般に読まれたのか、「共同保育所」の「共同」とは当時どのような意味で使われたのか、など活発な意見交換がなされた。
- ・また、宍戸会員から、著者の一人阿部和子は、東北大学法学部長であった哲学者の阿部次郎の娘で、東京女子高等師範をその社会主義思想により追放され、そのため父親の阿部次郎は何度も辞職願を書き、慰留されているなど、興味深い裏話を披露された。彼女については宍戸会員の論考の他に、彼女自身の遺稿集が刊行されている。

○澤田真弓

「幼稚園・保育所における子育て支援活動の現状と課題」

- ・澤田会員は、平成 20 年の幼稚園教育要領改訂で、幼稚園が地域の子育て支援センター的役割を担うべきという内容が盛り込まれ、幼稚園教諭の職務内容として、子育て中の保護者に対する支援が求められることになった。保育所保育指針についても、同様の改訂がなされ、保育者養成課程の新カリキュラムでは、「児童福祉」が「指導過程福祉」に科目名変更され、「家族援助論」「社会福祉援助技術」といった科目の新設が

ある。

- ・こうした状況の中で、幼稚園、保育所が行っている様々な取り組み、園庭開放、子育てサークルへの出張指導、相談援助などのうち、幼稚園、保育所で行われている園庭開放活動を例に報告した。
- ・幼稚園、保育所が担う「地域子育て支援拠点事業」は、ひろば型、センター型、児童館型と3つのタイプがあるなかで、センター型にあたる。その活動には、1.特別な配慮を必要とする子どもと保護者に対するもの、2.預かり型の支援、3.居場所提供型、4.行事型支援、5.相談・助言型の支援の5つの形態があり、園庭開放は、そのうちでも行事型の支援になる。
- ・園庭開放を3つの幼稚園の実際の活動、うち2つは園庭開放の活動計画の流れを追ってその実際を紹介する。半日、約2時間の間に7~9種の活動が盛り込まれ、描画、製作、歌、リトミック、体操、パネルシアター、エプロンシアター、劇と、それぞれ5分から10分間隔で、参加者はベルトコンベアー式にそのプログラムの流れの中に載せられていく。日常とは異なる新鮮な体験の中で、なかには自分の子育てに不安を抱く保護者も出てくる。
- ・「先生の話の全く聞かないで、勝手に走りまわる我が子を度々叱ってしまった」「よその子はなんでもできるのに、うちの子は活動についていけない。来年は入園を考えているのに・・・」など。おやつ時間などは、気軽な相談・助言の場になったりするが、プログラムの中で十分にそれに時間が割けるわけではない。
- ・幼稚園は、新入園児募集とも絡んで、なおさらにプログラムは過密になっている。子育て支援活動としての視点から、園庭開放のあり方を考えなおす必要がある。地域の未就園親子が気楽に幼稚園、保育所を訪れ、そこにある環境に触れながらそれぞれ自由な時間を過ごすだけでも、子育て支援の一環とは思えないだろうか、という提言であった。
- ・質疑応答では、浅野会員から、対象者は母親か子どもかどちらなのだろうか。「どちらの筋肉を使うのか分かっていないと、チグハグになってしまうのではないだろうか」とか、松川会員からは、療育場面だと、親としては、自分がやるとうまくできないのに、園ではうまく出来るというのが、悩みの種になる、ということもあるとか、子育て支援事業は、子育てサークルへの出張や子育て講座など、月に何回とかいった制度上の縛りがあって難しい。こうしたイベントを求めてジプシーのように渡り歩く親も出てくる。市内の親子のみを対象にするのか、市外からでも参加可能なのかによっても、いろいろ違って来る、など実地に即した質問や助言が輩出して活発な意見交換が行わ

れた。

-
- 次回は、12月10日（土曜）13時から、今回に引き続き龍谷大学の田岡先生に会場の方をお引き受け願うということになった。報告者としては、柏原先生、石川を予定している。

書記 石川道夫